

2021年2月17日

三十年ほど前、私が担任をしていた学校の隣に都立のろう学校がありました。日常的に深い連携があり、互いの行事への参加や週一回のクラブ活動の時間は合同で行っていました。二つの学校の子どもたちは、いつもその時間を楽しんでいました。

十五日の放送月曜朝礼では、お子さんたちに次のような話をしました。



(手話で) みなさん おはよう ございます

立教小学校では、二月をふれあい月間と呼び、人と人とのふれあい、助け合いについて考える月としています。

私は最近月曜朝礼では、最初と最後に手話で挨拶をしています。「おはよう ございます」や「ありがとう」の手話を覚えてくれた人もいることでしょう。

先日、三年生の人に、「なぜ手話を使って挨拶をするのですか。」と尋ねられました。事務室前で立ち話だったので、ゆっくり話すことができなかったのですが、私はとてもうれしくなりました。少しでも、手話に興味を持ってくれた人がいたからです。

耳の不自由な方々にとって、手話は大事な言葉

です。自分の考えや気持ちを伝え、相手の考えや気持ちを知るための大事な言葉なのです。

私が手話を朝礼の挨拶でしているのは、ここが立教小学校だからです。

立教と名の付いている学校には、小学校から大学まで同じ大きな目標が二つあります。そのうちのひとつが「共に生きる力を育てる」というものです。「共に生きる」とは、だれとでもいっしょに生きるといことです。そのために大切なことのひとつとして、言葉があります。立教の基になった立教学校は聖書と英語を教える学校でした。ですから、立教小学校では七十三年前にできたときから今でも、一年生から聖書と英語を教えています。

立教は学校ができたときから、言葉の学びを大切にしてきたのです。その中に手話もあります。

立教大学では、耳の不自由な人たちにとって、手話が大切な言葉であると認められる前から手話を学ぶことができました。聞くことの不自由な人と一緒に生きるために、立教大学は手話を言葉として教える数少ない大学だったのです。

耳の不自由な方は、見ただけではわかりません。目の不自由な方は白い杖をついていたり、盲導犬と一緒に歩いていたりします。体の不自由な方は、杖をついていたり、車いすに乗ったりしています。しかし、耳の不自由な方は、見ただけではわかりません。後ろから来る自転車が、ベルを鳴らして道をあけてもらおうとしても、耳の不自由な方には聞こえないのです。車がクラクションを鳴らし

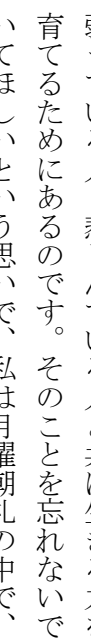
ても、聞こえないのです。後ろから「危ないですよ。」と声をかけても、聞こえないのです。聞くことが不自由な方は、外ではいつも安全に気を付けて緊張しながら歩いているのです。外から見ただけでは、困っているとか、悲しんでいるとか、さみしい気持ちでいるとかがわからない人たちが、私たちの周りにいて、一緒に生きていくことも私たちは知らなければいけません。

立教と名の付く学校での学びは、困っている人、弱っている人、悲しんでいる人と共に生きる力を育てるためにあるのです。そのことを忘れないでいてほしいという思いで、私は月曜朝礼の中で、手話で挨拶をしています。

(手話で) お話を 聞いて くれて ありがとう お話を 終わります。

立教大学では、二〇一〇年言語自由科目の一つとして「日本手話」が開講されました。当時言語科目として「日本手話」を取り入れている大学は限られていました。世界で手話が言語として認められたのは、二〇〇六年の国連総会においてでした。日本で認められたのは二〇一一年のことです。立教大学における言語科目開講はその前に行われていたのです。

(立教小学校校長 佐々木 正)



(立教小学校校長 佐々木 正)